

特定質問 1：トラウマか、残酷か

鳥居 千朗

はじめに、私が本書『現象一外』（2021）の中で感銘を受けた一節を引用します。ファルク氏は本書を通じて、今日の他者論の潮流を批判し、孤独の再評価を行っています。その論調は、こんにち大学で哲学を勉強しはじめた学生が置かれている状況を見事に言い当てたものになっており、それだけで読み手に一種の救いのようなものをもたらし得るものでした。

自我の面前の他人や、自我に対峙した他人といったものに直ちに言及しない、というのは、もうほとんど不敬罪を犯そうとするが如くとなっており、他人によるかかる救済は否定され得ないかのようなものである。（p. 395¹）

孤独を積極的なものとして語り、恐らくは素朴なアソシエーションイズムへの批判ともなり得る射程を持った本書の、倫理的・人間学的な意義は決して揺るがないものです。以下に提出する疑問を経てもなおそのことに変わりはないでしょう。

本論

2022 年、本書をめぐって、パリ・カトリック学院（ICP）が主催したコロックがありました。そこでファルク氏は、メルロ＝ポンティを含む伝統的な現象学の限界に関してルノー・バルバラス氏が提出した極めて濃密な問いに応答しています²。私は、メルロ＝ポンティ現象学を専門とする一学生として、バルバラス氏の理論的な問いを引き継ぐような質問をしたいと思います。ただし今度は、より具体的で、一見するとより特殊であるような問題系を手掛かりとします——即ち、母の問題、母性の問題です。

本書第 6 章「原初的孤独 *La solitude originelle*」においてファルク氏は、主体の孤独が、なんらかの、あるいはいくつものトラウマを通じて養われた、それ自体積極的な帰結であり、ある意味において第一のものなのだ、ということ、即ち主体にとって構成的 *constitutif* なものであって、決して他人や社会といったものに対する単なる欠如態ではないのだ、ということを主張しています。第 69 節「孤独と独我論」では、この命題はドナルド・ウィニコットやメラニー・クラインの児童心理学の一理論によって支えられています。即ち、「独りで居る能力 *capacité d'être seul*」の獲得こそが、母との癒合状態にある子を、己の孤独の内で生き延びることを始める一つの主体にするのだ、という理論です。「そしてこの能力に、たしか

に他我から（ここでは特に母から）出発してはいるものの、また自我（*私*）からも出発して、自己自身を構成する適性能が、依存しているのである」（p. 402）。たしかに、初めて（母が目の前に居るにもかかわらず）孤独を感じるという出来事こそが、即ち最初のトラウマこそが、主体が誕生するという出来事そのものなのです。「この点において、「我々の孤独」は我々各自にとって存在論的に第一のものなのであって、単に現象学に倣って第二のものと言うべきものではないのだ。削減不可能でもあれば破壊不可能でもあるもの——言い換えれば「不壊のもの *infrangible*」なのだ」（p. 403、傍点引用者）。主体の孤独、ないし孤独の核は還元不可能なものであり、それが有する積極性と倫理的な意義を認めなければならない、というのは全く正当でしょう。——しかしながら、ここで行われている論証には少々奇妙な点があります。というのも、子と母の間の関係の中で起きた出来事こそが孤独を生ぜしめたのであれば、むしろ第一のものは母との関係であって、孤独ではないと言うべきではないでしょうか？

ファルク氏が第 76 節で引用しているように、ここで働いている理論は「ほど良い母 *mère suffisamment bonne*」の理論です。手短に言えば、献身的すぎる母でも、無関心すぎる母でも、子を良き孤独にもたらしすることはできない、ということです。ところで、こうした議論は次の二点を前提、含意しているのではないのでしょうか？——第一に、構成的孤独は、仰る通り、トラウマを乗り越えてしまうような「レジリエンス」や「健康」を要請するものではありません。しかし今度は、孤独それ自体が、子を主体に変えることができるような真正な孤独、健康な孤独——たとえニーチェの言うごとき「大いなる健康」であれ（第 48 節、p. 285）——でなければならないということ。第二に、もし母あるいは母性がほど良いものでなかったら、その子は独りで居る能力を獲得することができないのだから、この真正な孤独を可能にしたのは母あるいは母性にほかならないのだということ。孤独が不壊であり還元不可能であるということを認めるとしても、それが第一のものであるか否かは別の問題ではないでしょうか。

これは決して重箱の隅をつつこうというわけではありません。私は、この起源としての母という問題が我々を、メルロ＝ポンティ現象学をはじめとする下層－現象性 *infra-phénoménalité* ないし地下の現象学 *phénoménologie de sous-sol* の限界という件の問題へ送り返すのだということを記しておきたいのです。生活世界の現象学者であるメルロ＝ポンティに従えば、あらゆる観念、あらゆる哲学は、超越論的現象野に、生活世界の様々な経験に、由来します。ファルク氏にとっては、現象－外 *hors phénomène*、あるいは諸々のトラウマ的出来事は、この現象学的沃野の体制そのものを破壊してしまうのであり、メルロ＝ポンティはそのことを見ていなかったのだということになります。第 56 節（第 5 章「危機」）では、サルトルがメルロ＝ポンティの死後に寄せた批判と、そこで用いられた象徴的表現が引用されています。「あらゆる実存の悲劇性から遠いところにいたので、〔……〕「比類なき子供時代から決して回復することがなかった」、「驚きはしたが、ただそれだけ」に見えるメルロ＝ポンティ」（p. 343）。——私としてはむしろ、メルロ＝ポンティは超越論的母の起源的性

格を忘却しなかったのだ、と言わねばならないように思われます。母からの逃避不可能性、母による包摂と言ってもよいでしょう。『知覚の現象学』（1945）では、身体的でほとんど非人称的な生のリズムが、人称的な主体の屹立を可能にも不可能にもしているということについて、次のように言われています。「私が悲嘆 *deuil* におしひしがれ、すっかり苦しみに見舞われている間にも、既に私のまなざしは前方をまさぐり、ぬかりなく何か輝いたものに興味を惹かれており、己の自律的な実存〔生存〕を再開している」³。「なんびとも完全に救われることはなく、完全に失われることもない」⁴。たしかに、孤独やトラウマが織りなすものは決して他のなにものにも還元されないものでしょう。しかしその還元不可能性それ自体が、知覚と生活世界の現象性によって支えられまた再び開かれるような、諸々の意味の網の目と ^{マトリックス} 母型 の只中にある、自然的世界の素材によって、産出ないし制度化されているのです。ひとがトラウマについて書き、様々な言葉を尽くして記述するとき、それは既に内ー現象性 *intra-phénoménalité* なのです。言い換えれば、孤独の第一義性を主張することは、この母性の遍在性となお徹底的に格闘するのでなければ、孤独を忘れまいとしてかえってこの未だ構成的な母のことを忘れることになってしまいかねないように思われます⁵。

これは、メルロ＝ポンティ流の和平主義 *irénisme* を単に擁護しようというのではなく、また孤独は母の欠如態に過ぎないと言いたいのもありません。反対に、いま孤独を取り上げなおそうというファルク氏のプロジェクトは、今日的状況の中で最も意義深い考えの一つであります。私はむしろここで、メルロ＝ポンティ哲学や（下層ー）現象性の哲学は、残酷なのだということを確認しておきたいのです。それは、現象ー外の記憶の義務を、それはそれでまた別の忘却と呼ぶ残酷さです。しかし実際、我々が生きている世界にはこのような残酷さがあるのではないのでしょうか。この意味において、かかる哲学は、世界の残酷さに、母性からの逃避不可能性に、孤独や現象ー外について語ることの困難さに、いっそう忠実であるのかもしれません。現象学の閉域の外に出るためにも、この不可能性について考える必要があります。それは真に外ー現象性 *extra-phénoménalité* に到達するためにこそ要請されることなのです。あるいは我々は、孤独の必然性と不可能性を同時に（脱ー）思考する〔使い果たす〕(*dé-)penser* 必要があるのかもしれません。

¹ E. Falque, *Hors phénomène*, Hermann Glassin, 2021. 以下、同書への参照指示はページ数のみ記す。

² « Colloque | Hors phénomène : Dialogue avec Emmanuel Falque », ICP, YouTube, le 21 mars 2022. (<https://www.youtube.com/watch?v=JQYIW0nGssc>)

³ Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. p.100. = 『知覚の現象学』I、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967年、151頁。

⁴ Ibid. p.199=I282 頁。

⁵ 一人の人間〔男〕un homme の孤独と、第 77 節で語られている「核分裂」(p. 54) の比喻と、それから女性的なものとの関係についてさらに踏み込んで考えるならば、クリストファー・ノーランの映画『オッペンハイマー』(2023) について、原子爆弾によって「穴 trouée」を空けられ、「自然の実際の絶滅」(シェリング『学問論』) に苦しんでいる国の哲学者たちと共に論ずるのがよいだろう。母性の問題についていえば、江藤淳の『成熟と喪失』(1967) や、竹村和子が『愛について』(2002) の中で、母の存在を覆い隠す精神分析理論に対して行った批判が重要である。